時　一九二〇年晩秋

所　墺伊の國境に近きチロル・アルプスの小邑コルチナ。

人物　アマノ
　　ステラ
　　エリザ

ホテル・パンションの食堂。午後七時。
ストーブの火が燃えてゐる。
ステラ、喪服、ヴェールで眼を覆つてゐる。珈琲を飲みながら、書物の頁を繰る。
エリザ、珈琲注ぎを持ちたるまま、傍らに立つ。
ほかに誰もゐない。

エリザ　明日(あした)はあなたがおたち、明後日(あさつて)はアマノさん……。
　さうすると……
　あとは、このホテルも空つぽ……。
　沈黙。
ステラ　汽車の時間はわかつて？
エリザ　まだ伯父さんが歸つて來ませんの。
　もう一日お延ばしになつたら…
ステラ　だつて、もう荷物ごしらへをしてしまつたんですもの……（間）
　それに……

雪でも降り出すと厄介だし……。

エリザ　大丈夫ですわ、まだ……

牧場のサフランが咲いてゐるうちは……（間）

でも……急に寒くなりましたわね。

ステラ　折角、いい落着き場所を見つけたと思つてゐたのに……。

エリザ　あなたのやうに、夏はどこ、冬はどこつて、自由に旅行がなされる方は、おしあはせですわ。

ステラ　あたしも、出來ることなら、一と所に落着いて暮したいの……（間）

これでもう、一人ぼつちの旅を二年……

どこへ行つても、何かしら氣に入らないことがあつて、かうやつて方々を歩き廻つてるんだわ。

エリザ　アマノさんも、そんなことおつしやつてましたわ……。

あの方も、お國をお出になつてから、隨分になるんですつてね。

寒いのは、かまはないから、ここにおいてくれつておつしやるんですけど、あの方お一人のために、このホテルを開けておくわけにも行きませんし……

ステラ　（書物に眼をおとして）フロレンスへいらつしやるんですつて、あの方……？

エリザ　さあ……。

それもまだ、はつきりお決めになつたわけぢやないんでせう。

あなたが、シシリイへいらつしやるつていふお話をしたら……

ステラ　（笑ひながら、眼をあげて）なんて？

この時、アマノ、手にサフランの花束を持ちて入り來る。

エリザ　ごゆつくりでしたわね。

アマノ　遲くなつてすみません。（ステラの方に花束を差し出し）

綺麗でせう。

ステラ　（花束を受取り、香ひを嗅ぎながら）あたしに？　まあ、ご親切ね、あなたは。

アマノ　（食卓に着き、エリザに）今日はなに……？

エリザ　（皿を運びながら）鮎ですの。そのあとが、羚羊（かもしか）と栗……。

アマノ　奥さんは、もうおすみですか？

ステラ　（書物から眼を離さずに）ええ、お先へ……。

ごゆつくり召上れ。

アマノ　（食事をしはじめる）うまい。

ステラ　どこへいらつしつたの、今日は？

アマノ　（やや皮肉な微笑をうかべ）例のところ……。

ステラ　（努めて氣輕に）お城……？

アマノ　よくご存じですね。
ステラ　別に不思議はないでせう……（間）
　さういふことがお好きね、あなたは。
アマノ　どういふこと……？
ステラ　人に見られないやうに、人のすることを見たりなんか……。
アマノ　見られてるから世話はない。
　それに、あそこは公園です。
　あなたも、見られてわるいやうなことはなさらない。
ステラ　よしあしにかかはらずよ。
　あたし、あの山に映る夕陽の色が好きなの……。
アマノ　莊嚴ですね、あの眺めは。
ステラ　ミスチックなところがあるでせう。
　祈りの美しさね。
アマノ　一體、チロルの自然は――生活もさうだが――宗教的な美しさをもつてゐます……。
　あなたはクリスチャンでせう？
ステラ　あたし、無宗教……。
アマノ　無信仰ぢやないでせう。

ステラ　どう違ふの……結局。
アマノ　僕は、まだ、あなたがほんたうに何國の方だか知らないんですよ。
ステラ　宿帳をご覧になればわかるわ。
アマノ　宿帳は宿帳ですよ。
　あなたは、アメリカ人ぢやない。（相手を見据ゑる）……
ステラ　さう？（から云つて、珈琲の最後の一口を飲み干す）
アマノ　僕は、自分が日本人であることに、それほど注意してゐない。それだけ、人が何國人だといふことにも、あんまり興味がないんです。
　われわれは、それほど、かけ離れた生活はしてゐないと思ひます。
ステラ　それはさうね。（席を起ち、長椅子に投げかかる）
　そりやさうだわ。
　沈黙。
アマノ　奥さん、たうとうお別れしなければなりませんね。
ステラ　（言葉を用意してゐたやうに）一生のお別れかもしれないわね。
エリザ　お二人とも、また春になつたら、ここへいらつしやるんでせう？
　いつか、さうおつしやつたわ。
ステラ　（笑ひながら）あたしは、あなたにさう云つたのよ。

アマノ　僕はどうだつたかなあ……。
何れにしても、一生の別れ……さういふ氣がしますね。
わるい氣持ぢやないな……お互にさうなら……。
ステラ　（半ば微笑を以て）ほんと……。
アマノ　旅をする人間の心持は、變なものですね。
友情に對しては、恐しいほど敏感になる……。
そのくせ、情熱の前には、可笑しいくらゐ臆病です。
さうお思ひになりませんか。
ステラ　さあ。……情熱つて……。
アマノ　ええ……。
僕は今日、つくづくさう思ひました。
ステラ　（耳を澄まして）エリザさん、聞えない……？　窓……。
エリザ　（急いで、一方の窓に馳せ寄り、カーテンを細目にあけ）どこ……？
アマノ　（面白がつて）こつちだ。
エリザ　（もう一方の窓に行き）うそ。
ステラ　（笑ひながら）やつぱり、こつちよ、そら……。
エリザ　（そつちへ行き、今度は思ひ切つて窓を開け）

ここよ、ルナアト……。
どうしたの？
え、伯父さん？
町へ行つたの……？
まだいいのよ。
あら……
ぢや、どこで……？　今すぐ？　ぢき行くから待つてて。（窓を閉める）
ステラ　ここへ連れていらつしやいよ、一度……。
エリザ　（そはそはしながら、アマノに）ゆつくり召上つていいわ。
アマノ　ゆつくり……？　不思議だなあ……。
ぢや、食ふものは、みんな、ここへ出しといて……
勝手に食ふから……。
エリザ　（次の皿と珈琲を運び）ほんとにいいこと……？
アマノ　伯父さんに云ひつけようかな。
エリザ　さうしたら、逃げ出すばかりだわ、あたし……（くるりと廻る）
ステラ　ささう……。
早く行つておあげなさい。

じれつたがつてゐるわ、あなたの少尉さん……、劍をがちやがちや云はせて……。

エリザ　（もぢもぢして）たまにはいいのよ。

ステラ　おや……今頃から。

エリザ　（髪に手をあてながら、戸口に近づき）伯父さんが歸つて來たら、もう寢てるつて云つて頂戴ね。

アマノ　どこで……？

エリザ　（走り去りながら）いやな方。

アマノ　この夏、或る獨逸の士官に聞いたんですがね……戰爭中、佛蘭西の田舍を占領してゐた先生たちの中隊が、いよいよ引上げるつていふ日、村ぢゆうの若い娘たちが、道ばたで、聲を立てて泣いたつて云ひますからね。

ステラ　いやな話ね。

アマノ　さうかしら……。

ステラ　それに……（何か云はうとして急に口を噤む）

アマノ　あなたは、人間の情熱といふやうなものを、わりに、甘く見ておいでのやうですね。

ステラ　わりに……ですか？

アマノ　さうでせう。

ステラ　あなたこそ、日本の方らしくないのね。

アマノ　どうしたと云ふんです？

ステラ　いいえ、なんでもないの。
　もつと日本の話を聞かして下さらない？

アマノ　（笑つて答へない）

ステラ　ちつとも、お國の話をなさらないのね、あなたは。

アマノ　あなたは……？

ステラ　長崎つて、佳いとこでせう？

アマノ　そんなことを聞いて、どうなさるんです？

ステラ　どうもしないけれど……。

アマノ　それより、あなたは、ほんたうは何國の方です？

ステラ　さつき、なんておつしやつて？

アマノ　僕がなぜ、それを知りたがるかつていふと、あなたは、ことさらに隱しておいでになるからです。
　僕はあなたが、墺太利人であるよりも、伊太利人であることを望んでやしませんよ。

ステラ　知つてますわ。（間）
　それはどうだか、わかるもんですか。
　ぢや、あててご覽なさい。

アマノ　あてますから、一度、あなたのお眼を拜見……（起ち上つて、ストーブのそばに行く）

ステラ　どうぞ……いくらでも……。
アマノ　ヴェールをどけて……。
ステラ　いけません、それは……。
アマノ　それご覽なさい。
　あなたも、そんなことが、お好きなんですね。
ステラ　駄目よ、そんなことおつしやつたつて……。
アマノ　（ステラに背を向けたまま）ヴェールを透して見るあなたのお眼は……ものを言はない口のやうなものです。
　あなたの眼の中には、きつと、僕が今まで知らなかつたものが、あるに違ひない。
ステラ　ものずきね、あなたも……。
アマノ　いけませんか……（間）
　あなたは、よく泣いておいでですね。
沈默。
ステラ　……。
アマノ　あなたの涙は、夢から夢を傳はる涙でせう。
ステラ　（溜息）あたしの夢……それは、どんな夢だかご存じ？
アマノ　（振り向いて）あなたの夢ですか……。

　それは、現實のすべてを包む霧のやうな夢です。
　あなたが、旅をなさる……それも、あなたにとつては、一つの夢……。
　讀書をなさる、……それも夢……。
　戀をなさる……それも一つの夢……。
ステラ　待つて頂戴……。
　かうして、あなたとお話をしてるのは……。
　うそ……。
　第一、あたしは生きてゐます。
アマノ　あなたは、あなたの夢を生きておいでになる。
ステラ　そんなら……一つの夢をね。
アマノ　思ひ出でせう……悲しい、華やかな……。
　よくあるやつだ。
ステラ　うれしさうね。
アマノ　ちつとも……（眞面目に）
　僕がやつぱり、さうなんです。
沈默。
ステラ　さうおつしやるだらうと思つてゐました。

アマノ　云はなくてもよかつたんです。
ステラ　ぢや、何かもつと、ほかの話をしませう。
アマノ　ほかの話……それもいいでせう。（間）
　あなたが、いつも讀んでいらつしやる本……あれはなんです……？
ステラ　これ？（手に持ちたる本を見せようとして、慌てて後ろへ隠し）
　なんでもいいぢやありませんか。
　もう、あたしに、なんにも訊かないで頂戴、ね。
　質問は、一切、受け附けないことよ。
アマノ　それぢや、お話ができない。
　今まで、かういふ機會がなかつたんです。
　食事がすむと、あなたは、いつも人を避けて、讀書と瞑想に耽つておいでになる。
　この食堂以外、僕は、あなたに近寄ることすら出來なかつたんです。（間）
　今日は、最後の晩ぢやありませんか。
ステラ　最後の晩……。
　それも、空想の遊戯ね。
アマノ　さうです……。
　その空想の遊戯を、もつと面白くする方法はありませんか……二人で……。

　お斷りしておきますが……、
　あしたの朝、あなたの馬車があの峠を越えたら、僕は永久にあなたの夢から消えてしまふ男です。
ステラ　あなたは、眞面目に、そんなことをおつしやるの？
アマノ　さういふものぢやないでせうか。
　旅人同志の心は、約束に縛られない友情で結びつけられるものです。
　また握れるかどうか、わからない、さう思ひながら握る手に、旅らしい自由な力がこもるんぢやないでせうか……。（間）
　このチロルの山奥で、お互に身の上話さへしたことのない二人が……
　二度と再び會はないといふ誓ひを立てた上で、
　久しく別れてゐた戀人のやうな一夜を明かして見たら……
　どんなに、面白いでせう。（間）
　ようござんすか……、
　あなたは、夢を見ておいでになる。
　もう一人、夢を見てゐる男がゐる……。
　二人の夢が、重なり合ふ……。
　ただ、それだけ……。（間）

夢で遇つた二人が、夢で戀をする。
どうです……、
さういふ戀を、一度、してみたいとは思ひませんか。
ステラ　あたしは、一人で夢を見てゐる方がいいの。
アマノ　あなたはあなたで、好きな夢をご覽なさい。
僕は僕で、好きな夢を見ます。
ステラ　それで、どうするの？
アマノ　あなたが愛していらつしやる男が、僕だとします。
ステラ　あなたが愛しておいでになる女が、あたし……？
アマノ　僕とあなたとではない……
あなたの戀人と、あなた……
僕の戀人と、僕……
とが、今ここにゐるわけです。
ステラ　（笑ひながら）それから……？
アマノ　それからは、云はなくつてもおわかりでせう。
ステラ　それぢや、まごとね……
お芝居ね。

アマノ　眞劍なまごとです。
眞劍なお芝居です。
さ、
あなたは、僕を愛してゐる……。
ステラ　だつて……。
アマノ　さうしておくんです。
ステラ　あなたは、あたしを愛してるの？
アマノ　ええ……。
下手な經驗よりは、合理的な想像の方がいいんですよ。
さ、かうして、
あなたの戀人が、あなたの足許に跪いてゐます。（跪かない）
ステラ　（笑ふ）
アマノ　笑つちやいけません。
ステラ　薪をくべませう。
アマノ　（薪をストーブにくべながら）僕は、あなたの心臓に耳を當てて、微かな囁きを聞き漏すまいとしてゐます。あなたの屑から漏れる吐息を……（ステラの傍に近づき）
胸一つぱい吸ひ込まうとしてゐます。

あなたは、それを感じておいでになる。それは、夢です。
さ、
その夢の先を見ませう。（ステラの傍に寄り添ひて腰をおろす）
ステラ　（やゝ聲をふるはせて）をかしいわ。
アマノ　をかしい……？
をかしいと思ふから可笑しいんです。
子供の遊びを、大人が見てゐてはいけません。
（ステラの耳に口を寄せ）僕はあなたを愛してゐます……心の底から愛してゐます。
僕は、あなたの美しさに、魂を奪はれてゐる男です……。
月並だなあ……。
然し、まあ、いい……聞いて下さい……。
僕は、あなたの夢を亂したくない。
僕も、僕の夢を亂したくない……。
戀を滲げた刹那の歡びは、永久に續くものではありません。
僕は、あなたを獲た瞬間に、あなたを失ひたいんです。
わかりますか、僕の云ふことが……？
わからない？

僕が、あなたに愛されてゐると思ふ瞬間……
あなたの脣が、僕の脣に觸れる瞬間、
その瞬間は、
僕の生涯を通じて、最も幸福な夢なのです……。
先づ、僕の手を强く握り締めて下さい……。（ステラの手を取る）
ステラ　（身ぶるひして）お芝居よ……
ほんとにお芝居よ……。
アマノ　（兩手を取らうとして）怖がつちゃ駄目……。
ステラ　（アマノ手を拂ひのけて）いいえ、いいえ、いけません。
あなたといふ方が、あたしの夢の中に出て來てはいけません。
あたしは、それが一番……、
あなたのやうな方なの……あたしの夢をさますのは……。
アマノ　僕は、通りすがりの男です。
道ばたで、あなたの靴を磨いた男です。
汽車の中で、あなたに席を讓つた男です。
劇場で、あなたが、ハンケチを拾はせた男です……。
ステラ　（しんみり）あなたは、女の心をご存じないのね。

アマノ　（ステラの手を取り）無關心な女の心は、讀みやうがありません。

ステラ　（思ひ返したやうに、アマノの手を握り締め）いいわ……。

ぢや、一緒にお芝居をしませう。

その代り、約束を忘れちやいやよ。

今夜だけ……。

ね、よくつて……

今夜だけ……。

（醉ったやうに）さ、もつと、何か云つて頂戴……

あたしは、淋しいの……。

今夜は、どうしてだか、淋しいの……。

今まで、見つづけてゐた夢が、これでおしまひになるのではないかと、思はれるほど、淋しいの……。

さ、

早く、何か云つて頂戴……。

アマノ　その前に、あなたの眼を、一度……。

ね、ヴェールをどけて……。（ステラの肩に手をかけ、引き寄せる）

おや、

どうして、泣くんです？

沈默。

ステラ　（ヴェールを外し、涙をふく）

アマノ　何が、そんなに、悲しいんです？

ステラ　悲しくはないのよ……。

癖なの……。（アマノの方を見て微笑む）

アマノ　ああ、これ、これ……

この眼……。（ステラを抱く）

ステラ　もつと、しつかり、抱き締めて頂戴。

あたしは、あの人に抱かれてるのよ。

（だんだん熱を帶びて來る）あなたは、あたしの大好きな、大好きな人よ。

さ、もつと、強く……。

なんて靜かな晩でせう。

ちやうど、あの晩のやうね……。

——昔だわ——

あなた、ふるへてるの……。（間）

あたしを騙しちや、いやよ。

あなたは、ひどい方……
今夜ぎりだなんて……。

アマノ　（氣がついたやうに）あなたは、いつまでも僕のものです。
この腕が、骨になるまで、あなたを放しません。

ステラ　いや……そんな氣味のわるいことを云つちや……。
それより、あなたのブロンドの髪が灰色になるまで……。
あたしの黑い瞳が、蒼色になるまでつておつしやい。

アマノ　僕の髪の毛は、ブロンドぢやありません。

ステラ　そんなことは、どうでもいいのよ。
——どうせ、形容ですもの。
怒らないでね。
あなたは、日本の方ね。
あたしのお母さん、長崎で生れたの……。
ハマつていふ名……。

アマノ　（驚いて、ステラの顔を見る）

ステラ　どうして、そんなに吃驚なさるの？
あたしの眼が黑いから……？

それや、しかたがないわ。
あなた、黑い瞳は、おきらひ……？

アマノ　（あらたまつて）ステラさん、僕に、ほんとのことを云つて下さい。
今、おつしやつたことは、冗談ぢやないでせうね？

ステラ　いやよ……そんな、怖い顔をしちや……。

アマノ　（固くなつて）もうお芝居はよしませう。
僕は、あらためてあなたにお願ひがあります。
あなたの身の上を打ち明けて下さい。

ステラ　あなたは、變な方ね。

アマノ　あなたには、僕の氣持がわからないんですか？

ステラ　わかつても、わからなくつても、おんなじよ……
どうせ、お芝居ですもの……

沈黙。

さ、そんな眞面目くさつたことは、云はないで、
夢の續きを見ませう。
あたしの氣が變つたら、もうおしまひよ。

アマノ　誤解しないで下さい。

僕には、ほんたうのあなたが、今わかつたやうな氣がするんです。
今まで知らなかつたあなたの眼の中に、僕は、自分の全生涯を見出したやうな氣がするんです。
幸福な一瞬間では、滿足ができないんです。

ステラ　（アマノの頸に腕を投げかけ）いいから、もつと、こつちへお寄んなさい。
いつだつたかしら……
あの、ライン河の流れを見下ろす、
ヴィラ……なんでしたつけね……
いいの……
あたしが、初めて、あのヴィラに泊つた晩ね……
船遊びをした日よ……遲くまで……
あの晩……
あなたは、あんなに醉つてさ……
どうして、あんなに醉つたの？
あら、あたしが醉はせたの……（いきなり、アマノを抱き寄せて、唇をあてる）
駄目よ、そんなに默つてちや。（間）
あたしの寢室は、あなたの隣りだつたわね……

あたしが、窓を開けると、あなたも窓をお開けになつたわね。
それから、どうでしたつけ……？

アマノ　（しかたなしに）それから、僕が咳拂ひをしたんです。

ステラ　あ、さう、さう……
さうしたら……？あたしは……？

アマノ　あなたは、窓を閉めておしまひになつた。

ステラ　うそばつかし……
あたし、唄を歌つたんぢやありませんか……（小唄の一節を口ずさむ）

アマノ　その唄なら、覺えてゐます。

ステラ　ね。
それからが、あのバルコニーよ。
靜かな晩だつたわね……
……星が出て……。
あなたが、そら、をかしいの、子供みたいに……
覺えてる……？

アマノ　それからが、チロルの旅……
コルチナの秋の夜。

星のかはりに、ほら、ストーブの火が燃えてゐます……

ステラ　あんまり早すぎてよ……

あなたは、昔から、せつかちね。

アマノ　その途中は、もうたくさん。

あした、僕も、あなたと一緒に、シシリイへ行きます。

ステラ　シシリイへ……？

蛇がゐてよ。

アマノ　蛇、蛇もゐるでせう。

あなたは、冷たい大理石の床を、素足で歩くことが、お好きでしたね。

ステラ　オレンヂ畑を吹いて來る風に、髪をなぶらせることも、好き……

さう、さう……

あなたは、笛がお上手ね。

アマノ　（暗い表情）笛ですか……

笛も吹きませう。

沈默。

ステラ　どうしたの？

あたし、何か云つたかしら……。

アマノ　いいえ。（間）

（冷やかに）誰と話をしてゐるんです、あなたは……？

誰です一體、その笛の上手なのは？

（氣がついたやうに）馬鹿でせう、こんなことを訊くのは……。

ぢや、それは、もう訊きますまい。（間）

しかし、なんとでも、返事をして下さい……

この僕に返事をして下さい。

眠くはありませんか。

ステラ　（突ひたきうに）まだ疑つていらつしやるのね、あなたは。

ぢや、いいから、あたしを、どこへでも連れて行つて頂戴。

さうして、あなたの氣のすむやうに……。

アマノ　いいえ、いいえ、そんなことぢやないんです。

僕は、あなたの夢をさましたくなつたのです。

夢を見てゐないあなたの心に、なんとか、ものを云はせてみたいんです。

そうら、

もう、あなたは、そつちを向くでせう。

（ステラの肩に手をかけ）どら……あなたの眼は、今何を見てゐるんです？

誰を見てゐるんです？

ステラさん……

僕の聲が聞えますか？

ステラ　（微かに）しばらく、默つて頂戴……。

沈默。

あたし、どうして、かうなんだらう。

アマノ　ね、をかしいでせう？

何を探してゐるんです、あなたは。

ステラ　なんにも、探してなんぞゐませんわ。

アマノ　ぢや、僕に用はないんですね？

ステラ　あなたに……？

あなたは、どなた……？

いいえ、あなたは默つていらつしやい。

……獨りで考へるから。

アマノ　あなたは、ものを考へてはいけない。

あなたは、あなたの情熱が命ずるままに、からだを投げ出せばいい。

遠い幻を、いつまでも追ふことが、どれだけあなたを苦しめてゐるか、それにお氣がつきま

せんか。

ステラ　ちつとも、苦しんでやしません……あたしは。

沈默。

（殆ど悲痛な調子で）——さうよ。

あなたさへ、あたしの眼に觸れないところにゐて下されば……

默つてゐて下されば……

それより、

あなたといふ方さへ、全く識らなければ……。（聲がだんだん微かになる）

アマノ　それなら、僕に、どうしろと、おつしやるんです？

（勝ち誇るやうに）死んでしまへと、おつしやるんですか？

ステラ　（きつぱり）ええ、死んでおしまひなさい。

アマノ　（ステラの手を取り、飛び立つやうに）

ありがたう……。

僕の命は、あなたに差上げます。

その代り、

あなたの心は、僕が……

ステラ　（逃るやうに起ち上り）持つて行けるなら、持つていらつしやい。

沈黙。

アマノ　ステラさん……。

ステラ　もう、何時頃でせう。（窓ぎはに行き、カーテンを開けて、外を見る）
　また、ひどい霧……

アマノ　ストーブの火も消えました。

ステラ　ぢや、ぽつぽつ引上げませう。

沈黙。

アマノ　ステラさん……（起ち上る）

ステラ　さうね……
　やつぱり、獨りぼつちの方が、いいわね。
　……夢だけ見てゐるんなら……。

アマノ　（苦笑しながら）眼が覺めた時です、遊び相手が欲しくなるのは。

ステラ　あなたも、折角の夢をさまさないやうになさい。
　それでは、おやすみなさい。

アマノ　僕の夢はすぐさめさうです。

ステラ　（笑ひながら）さうしたら、また、「夢ごつこ」をしにいらつしやい。
　道は、ご存じね。

アマノ　あんまり遠くへ行かないで下さい。

ステラ　（アマノに近づき）では、また、あしたの朝……（手の甲を差し出す）
　さよならを云ひに、起きていらつしやい……きつと。

アマノ　さあ……（ステラの手に接吻し）
　それは、夢次第です。

ステラ　（笑ひながら）ええ、ええ、ようございますとも……。（用心深く手を引く）
　おやすみ。

アマノ　おやすみなさい。

ステラ　（後を見ずに出て去る）

アマノ　（ぢつとステラを見送る）

室外にて、エリザ、エリザと呼ぶ嗄れ聲。

沈黙。

――幕――

大正十三年九月